

I. 歓迎とレビュー

A. おはよう! おはようございます! カルバリーチャペル岩国へようこそ。

1. *新しい顔ぶれやオンラインストリーミングを歓迎する。*

B. これ以上話を続ける前に、小学生の子どもたちを日曜学校の教室に解散させよう。

1. *(2<sup>nd</sup>礼拝; 聖書英語のクラスは忘れずに解散する)*

C. 子供たちが外に出て行く間に、残りの人たちはヘブル書の10章に進んでくれるかな?

D. 今朝は、ヘブル人への手紙の第二章に入る。

1. 最初の主要なセクションは、主にイエス・キリストの優越性と優位性を扱った

。

a. ヘブライ人への手紙の研究では、著者がキリストの優位性を主張するさまざまな方法を指摘してきた。キリストは誰よりも、何ものよりも優れている。

b. 預言者たちよりも、天使たちよりも、モーセよりも、アロンやこれまで主に仕えたすべての大祭司たちよりも優れている。主は、より良い安息、より良い希望、より良い契約を与えてくださる。彼はより優れた祭司職の出身であり、より優れた聖所で仕えている。私たちの罪のために十字架で捧げられた犠牲は、より優れた犠牲であった。イエスがおられ、イエスがなさることはすべて、より優れている。

c. そしてそれが、ここまでの本のポイントだった。

2. だが、今度は何だ? 著者は自分の述べた。彼はそれを支持し、。私たちはそれを理解し、イエスがより優れていることを理解した。しかし、私たちはこれからどうすればいいのだろうか?

3. それが、この本の2番目、そして最後の大きなセクションのすべてである。それは、これらの事実を私たちの生活に適用することである。

a. イエスの方が優れているという事実は、あなたのどのような影響を与えるのか? キリストに従う者として、私たちは、キリストが誰よりも何ものよりも優れておられるという事実に対して何をすべきなのか?

b. この本の最初の10章半は、キリストが誰なのか、キリストが私たちのために何をしてくださったのかを説明する、より*情報的なもの*だった。

c. この本の残りの部分は、より*応用的である*。私たちに与えられたこの、私たちの生活に適用するのだ。私たちの信仰に足を踏み入れること、私たちの生活の中でこれらの真理を実践することなのだ。

4. 今朝のテキストはヘブル人への手紙10章19節から25節まで、わずか7である。月の第一日曜日でもあり、礼拝の終わりに聖餐式にあずかる予定なので、うまくいくことを願っている。

a. 聖句の小さな部分を担当することで、急かされたり、時間に追われたりすることなく、聖

E. そろそろヘブル人への手紙第10章にたどり着いたこと。もしそうなら神と神の御言葉を称え、立ち上がっていただきたい。

1. 今回も、テキストはヘブル人への手紙10章19節から25節で、勉強のタイトルは「目的を持った意図」である。
2. 私の聖書を読みながら、あなたの聖書も読んでみよう。ヘブル人への手紙の著者は、10章19節で次のように述べ、手紙の第二の主要部分に移行する。

## II. イントロ

A. 今朝のテキストは、それぞれ3つの文からなり、主動詞は接続法で書かれている。

1. さて、ご存じない方のために説明しておく、ギリシャ語の接続法は英語の接続法とは少し異なる。
  - a. 英語では、接続法は3つの文法的モードのうちの1つである。
    - i. 事実や意見を表すのに使われる指示法があり、主に質問をするのに使われる。
    - ii. 次に命令ある。これは命令するときに使われる。
    - iii. そして接続ある。仮定法は、仮定の行動を述べたり、願いを表現したりするときに使われる。接続法は、実際よりもむしろ可能性のある行動について話すときに使われる。
  - b. しかし、ギリシャ語では4つの動詞のモードがある。
    - i. 英語と同じように指示語と命令語があり、これらはほとんど同じように動作する。
    - ii. 接続法があり、そして4つ目の法は、彼らが「視唱法」と呼ぶものだ。
    - iii. ギリシア語のoptative moodは、主に動作が可能であることを表すのに使われる。
    - iv. ギリシア語の接続法は主に可能性のある、あるいは意図的な行為について話すのに使われる。
    - v. つまり、ギリシャ語の接続法は、英語のように仮定の状況や可能性のある状況を指すだけでなく、通常は可能性のある行為、あるいは意図的に行われることを意味する行為を示すのだ。

B. さて、本文中の3つの主な動詞はすべて接続法で書かれていると言えば、少しは理解できるだろう。

1. 著者は最初の10.5章を費やして、イエスがどれほど優れた方であるかを語り、そして今、その真理を私たちの人生に適用する時が来たのだ。
2. これまで述べてきたことを踏まえ、著者はより応用に重点を置くようになると、まず聴衆が目的をもって意図的にならないことを3つ挙げる。

3. イエスは誰よりも、すべてのものよりも優れておられるのだから、これこそが私たちのなすべきことであり、キリストに従う者として、私たちが意図的に行わなければならない行動なのだ。これらは、私たちににとって重要なことなのだ。

C. 19節から22節を見てみよう。そこには、ヘブル書でこれまで読んできたことに基づいて、私目的をもって意図的に行わなければならない最初の行動が記されている。この節をもう一度一緒に読んでみよう。

### III. ヘブル10:19-22; "神に近づこう"

A. 19節から22節は実際には1つの長い文章だが、文章を主な接続法動詞に分解すると、それは「近づこう」というフレーズにある。そして、その暗黙の考えは、神に近づこうよという呼びかけである。

1. 19節は「それゆえ」という言葉で始まる。19節は"それゆえ"という言葉で始まっている。聖書の中で"それゆえ"という言葉に出くわしたら、いつでも立ち止まって、それが何のためにあるのかを自問してみることをお勧めする。「それゆえ」は通常、今語られた考えと、その後続く考えとを結びつけるために使われる。
2. 著者が今語ったのは、イエスがいかに優れたいけにえであり、私たちの罪がいかに赦されたかということだ。そして、罪が赦されたからこそ、私たちは**神に近づくべき**なのだ。
3. それが、著者が私たちに呼びかけている最初の意図的な行動である。意図的に、意図的に神に近づくのである。しかし、どのようにするのか、一緒に考えてみよう。19-22節には、神に近づくための4つの方法がある。

B. その1、私たちは**大胆**に神に近づく。

1. それゆえ、兄弟たちよ、イエスの血によって、イエスの肉、すなわちペールをくぐって、私たちのために聖別してくださった新しい生きた道によって、聖なる所に入る勇気があるのです」。
2. 私たちは、イエス・キリストの血と十字架上の御業のおかげで、大胆に神の御前に、至聖所に入ることができるのだ。
3. 著者が至聖所とペールに言及するとき、彼は幕屋と後のイメージしている。
  - a. 聖所は幕屋の中に直接あったが、至聖所は幕屋の第一区画から、幕屋の中、そして後には神殿の中に、上から下まで垂れ下がる厚い幕（ペール）によって区切られた場所であった。
  - b. このペールは、祭司たちと神の臨在との間にある障壁のようなものだった。祭司たちは日常的に聖なる場所に入ることが許されていたが、大祭司だけが聖なる場所に入ることが許され、しかも1年のうち1日だけ、贖罪の日（ヨム・キブプール）に入ることが許されていた。
  - c. しかし私たちは、イエス・キリストが私たちのために、ペールを通して、肉を通して、新しい生きた道を開いてくださったので、大胆に神に近づくことができる。

- i. イエス・キリストが十字架で死なれ、息をれたとき、神殿のペールが上から下まで二つに裂けたと言われている（**マコ15:38**）。
- ii. イエスが私たちのために十字架で死なれたまさにその瞬間、神殿のペールが二つに裂けた。人と神との間の障壁が取り除かれたことを象徴している。それは十字架の御業によるものだった。

4. 興味深いことに、ここで"新しい"生き方と言っている"新しい"という言葉は、"新しい"という意味で使われる普通の言葉ではない。この言葉は「プロスパトス」といい、文字通り新しく殺された動物を意味し、新鮮な肉や採れたての野菜を指す使われた。

- a. イエスは、罪のためのいけにえとしてご自分の命を捨てられたからこそ、私たちが至聖所に入るための"新しい"道が可能になったのだ。しかしそれは新しい**生きた道**であることに注意してほしい。イエスは十字架の上で死なれたが、三日目に勝利のうちによみがえられた。この**新しく生ける道**は、イエスの完成された救いの業、すなわち十字架にかけられ、死者の中から復活されたことを語っている。
  - b. イエスは私たちの罪のために十字架で死なれ、その後死からよみがえられ、御父のもとに昇られたので、私たちが大胆に神に近づくことができる道を開いてくださったのである。
- C. ヘブル4:には、「それゆえ、私たちは、憐れみを得、必要な時に助けとなる恵みを見いだすために、大胆に恵みの座に近づこう。（**ヘブル4:16**）。
- i. 、ここで困っている人はいるだろうか？ 神の憐れみを必要としている人はいるだろうか？ あるいは神の恵みを必要としている人はいるだろうか？ 挙手を。
  - ii. そう、私たちは皆、神の恵みと憐れみを必要としている。そして、イエス・キリストが私たちのためにしてくださったこと、その血と犠牲とその後の復活のゆえに、私たちが大胆に御座の前に出て、憐れみを得、私たち皆が切実に必要としている恵みを見出す道を備えてくださったのだ。

5. キリストが私たちのために奉獻してくださった道を活用し、大胆に、自信を持って神の御前に入ることができるように。

C. さて、私たちが神に近づくには4つの方法があると言った。一つ目は、大胆にそうすること。つ目は、**キリストを大祭司として**神に近づくことである。

1. 21節には、イエスが神の家を治める大祭司であることが記されている。
2. 大祭司は、人間と神との間の"仲介役"であった。大祭司は人間を神に代表し、神を人間に代表した。
  - a. イエス・キリストは私たちの「仲介者」である。御父の前で私たちの弁護者であり、私執り成し、御父の前で私たちを代表してくださる。
  - b. そして同時に、イエスは私たちに父を表すために来られた。イエスは言われた。"わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。（**ヨハネ12:45**）

c. コロサイの信徒への手紙によれば、イエスは"目に見えない神のかたちであり、すべての被造物に対する長子"である。(コロサイ1:15)

d. 本書の冒頭、1章で著者はイエスを「(神の) 栄光の輝きであり、神の御姿の表れ」(ヘブライ1:3a) と語った。

3. 私たちが神に近づくことができるのは、イエスが私たちの偉大な大祭司としてその隙間に立っておられるからである。

a. 大祭司は人々のためにいけにえを捧げ、人々の罪を贖う責任があった。イエスは、私たちの憐れみ深く忠実な大祭司となり、罪のために身代わりとなってくださった。

b. 雄牛や山羊の血ではなく、御自身の血によって、私たちの罪を贖われただけでなく、完全に取り除かれたのである。

D. その3: **真の心**で神に近づく。

1. 22節には「真心をもって近づこう」とある。あなたの翻訳では「真心をもって」と読めるかもしれない。

2. つまり、私たちは神の前に偽りを持って現れないということだ。神の前で偽ろうとする必要はないのだ。神は私たちの心を見て、知っておられる。

3. 人間は外見を見て判断するが、主はそうではない。神は私たちをご覧になる。

4. 「人は外見を見るが、主は心を見られる」(サム第一16:7b)

5. 神は私たちの心を見ておられる。私たちの欠点や失敗を知っておられる。それでも私たちは、キリストが私たちのためにしてくださったことのゆえに、神に近づくことができるのだ。

6. 私たちは自分が罪人であることを知り、自分の心が切実に邪悪であることを知っている。

7. 主は預言者エレミヤを通してこう嘆いた。"心はすべてのことにまして欺くものであり、だれがそれを知ることができるか"。主であるわたしは心を探り、心を試す。(エレ.17-9-10)

8. 神は私たちの心を知っておられ、私たちの心を探られる。私たちが隠そうとしていることはすべて、御前にさらけ出される。だから私たちは、真実な心、真摯な心を持って主のもとに行き、主に近づくのだ。主が見ておられ、すべてをご存知であることを知りながら、主に大きく心を開くのだ。

9. 私たちが真実な心で主のもとに来るとき、カルバリの犠牲の現れる。私たちの心は、かつては邪悪であったが、小羊の血によって洗われ、清められた。

E. これが、私たちが神に近づく最後の方法である。キリストを大祭司として、真心をもって、大胆に神に近づくのである。

1. 22節はこう続ける。"私たちは、心を悪い良心から洗い清め、からだを清い水で洗われ、信仰を確信して、まことの心で近づこう"。

2. 著者は再び、幕屋の中での祭司の働きをイメージしている。

3. 祭司としての奉献の一環として、アロンとその息子たちは水で洗い、様々ないけにえを主の前にささげ、その血を祭壇の周りにまき散らし、最終的には自分自身と祭司の衣服にふりかけるよう求められた。この習慣については、出エジプト記29章を読んでいただきたい。

4. これは、祭司たちが主の奉仕に入るために必要なことだった。実際、神は、もし祭司たちが神の定めた通りに洗わなければ、実際に死ぬと言われた。もし彼らがこの特別な洗い清めの儀式に従わないなら、神は彼らの命を奪って罰するというのだ。

5. しかし、このような儀式的な洗いや清めに従うことを心配する必要はない。イエス・キリストは、私たちのために十字架にかかってくださったときに、私たちが洗い清めてくださったのだから。

6. 私たちの心は悪い良心から洗われ、私たちの体は清い水で洗われたことを知っているからだ。

a. これはもちろん、祭司たちの業とは対照的に、キリストが私たちのためになさった業を比喩的に言っているのだ。昔の賜物やいけにえは、それを行う者を良心に関して完全にすることはできなかった。(ヘブ.9:9)。

b. 旧約のやり方は、人間の良心、つまり人間の内的な働きを扱うことがまったくできなかった。外側、つまり外面だけに焦点をのた。

c. しかし、キリストへの信仰とキリストの救いの御業によって、神は私たちが内側から清めてくださった。私たちが新しくしてくださったのだ。

7. 信仰によって、神は私たちがきよめ、新しくしてくださった。

F. そして、キリストの存在とキリストが成し遂げてくださったすべてのことに基づいて、私たちの最初の意図的な行動は、神に近づくことであることがわかる。

1. 私たちはなんと素晴らしいのだろう。信じられないようなアクセスが我々に与えられている。

a. キリスト以前は、大祭司だけが神の御前に入り、神に近づくことができた。しかし今は、キリストとキリストが私たちのためにしてくださったことのゆえに、私たちは神に近づくことができる。

2. でなく、私たちが神に近づくと、神は私たちに近づいてくださるという神の言葉の保証もある。

a. ヤコブ4:8は言う。"神に近づけば、神はあなたがたに近づいてくださる"。(ヤコブ4:8a)

3. キリストを信じる信仰によって、私たちは神に近づき、主との親密で緊密な関係を楽しむことができる。

て、神が約束をされる時、神はそれを守られる。

G. では、私たちは他に何を意図的に、意図的にしなければのだろうか？ 23節を見てみよう。そこには、私たちが意図的に行くべき第二の記されている。

IV. ヘブル10:23; "私たちの希望の告白を堅く守ろう"

A. 私たちは、意図的に意図的に神に近づくだけでなく希望の告白を堅く守るのだ。

1. 著者が私たちの希望の告白について語るとき、それは私たちの救い、ひいては天における神との永遠の命についての希望を指していることがわかる。
    - a. 聖書が希望について語るとき、私たちが希望という言葉を使うのと同じ使われていない。英語では、希望という言葉はある種の希望的観測に関連して使われる。
      - i. 雨が止むことを願っている。雨が止むという保証や自信はあるのだろうか？ そうでもないけど、止むといいね
    - b. 聖書が希望という言葉を使うとき、それは何らかの良いものを手に入れるという期待とともに、それを望むことを語っている。
      - i. 聖書が"希望"という言葉を使うとき、それはある種の期待を伴っている。キリストにある希望とは、希望的観測ではなく、確かな期待なのだ。
  2. 著者がこの希望を語ったのはこれが初めてではない。
    - a. 3章に戻って、彼はイエスについて語り、イエスが御自分の家の上で子としていかに忠実であったかについて語った。(ヘブ.3:6)。
    - b. 6章で、著者は、私たちの前に置かれた望みを抱いて避難してきた人々について、また、私たちが抱いているこの望みが、確かに堅固な魂の錨であることについて語った。ヘブ.6:18b-19a)。
    - c. 第7章で、著者は律法がいかに完全なものでなかったか、また、他方では、より良い望みがもたらされ、それによって私たちは神に近づくことができる、と述べている(ヘブライ7:19)。(ヘブ.7:19)。
    - d. この手紙を通して、著者は絶えず私たちの希望について、私たちの永遠の贖罪との関連で言及している。
    - e. 私たちがこの地上で息を引き取るとき、私たちの永遠の贖い、キリストにあって、キリストによって将来栄光を受けることが絶対に確実なのだ。それは私たちの魂の錨である。私たちの未来は決まっていて、安全なのだ。
  3. だからこそ著者は、揺らぐことなく希望の告白を堅く守ることを語っているのだ。私たちの希望は揺るがず、不動であり、確かなものなのだ。
- B. そして、なぜ私たちはそこまで確信を持つことができるのだろうか？ なぜ著者は私たちに、揺らぐことなく希望の告白を堅く守るよう勧めているのだろうか？ まあ、その理由は非常にシンプルで深いのだが。
1. 約束された方は忠実だからだ。神は私たちに永遠の贖いを約束してくださった。そし

2. 神が私たちに約束される時、それは必ず実現する。神がその約束を果たして下さるのだ。

3. 神は嘘をつくことができない。民数記23章にはこう書かれている。「神は人ではないので、嘘をつかれることはない。言って、行わないことがあるだろうか。また、語って、行わないのか。"(民数記23:19)(民数記23:19)。

a. 私たちはいつも嘘をつき、いつも考えを変える。私たちは気まぐれで、信用できない。常に嘘をつくつもりはないが、守れない約束をしてしまうこともある。なぜなら私たちにはどうにもならないことがあるからだ。

b. しかし、神の支配を超えるものは何もない。神はすべてをおられ、ご自身の約束が実現するようにされる。

4. 神は忠実である。それが神のご性質、ご性質の一部なのだ。そして、何を理解することが素晴らしいかわかるだろうか？ 私たちの希望、永遠の、あなたや私が忠実かどうか、あなたや私が約束を守るかどうかに基づいているのではない。それは神と神の約束に基づいている。

a. 私たちはしばしばそれを台無しにする。もし私たちの永遠の希望が、私たちの誠実さに基づいているとしたら、私たちは皆、大変なことになっているだろう。私たちの多くは、とっくの昔に希望を捨てているだろう。

b. しかし、私たちの希望は神の誠実さに基づいている。テモテへの手紙二は、神の誠実さについて語り、それがいかに私たち自身の誠実さに左右されないかについて述べている。

i. 2テモテ2:13は言う。"私たちが不誠実であっても、主は忠実であり続け、ご自身を否定することはできない。"(2テモテ2:13)

5. なぜなら、それは神の誠実さに基づくものであり、私たち自身の誠実さに基づくものではないからだ。神は誠実である。神は私たちに永遠の贖いを約束して下さった。それは、主にあって、主によって定められており、安全なのだ。

C. では、本文の最後の2節を見てみよう。私たちのためにしてくださったすべてのことに基づいて、私たちがなすべき最後の目的意識的、意図的な行動を見てみよう。24節と25節と一緒に読もう。

V. ヘブル9:24-25; 「互いに思い合しましょう」。

A. ここに、キリストがどのようなお方であり、私たちのために何をしてくださったかに基づいて、私たちがなすべき3つ目の、そして最後の目的意識を見ることができる。私たちは意図的に、意図的に互いを思いやるのである。

1. 私たちの行動の流れを追うのは興味深いことだ。

a. まず第一に、私たちは神に近づき、大胆に神の御前に出て、主との親密な関係を楽しむ。

b. そして、神の約束をしっかりと守り、それに安住する。

C. しかし第三に、私たちのクリスチャン生活は、神と自分自身だけのものではないことがわかる。キリスト教とは、主との親密な関係を築き、その日のために生き、その日を待ち望むだけのものではない。

天国において、神と結ばれるのだ。神は私たちがこの地上にいる間に果たすべき計画と目的を持っておられ、それは他者をも巻き込んでいる。

d. クリスマン生活は自分と主だけのものではなく、他の人々も巻き込むものだ。

2. さて、内向的な人の中には、少し神経質になり、私の言うことが気に入らない人もいない。自分のクリスマン生活が、他の誰のことも気にすることなく、ただ自分と主のためだけにあることを望む人が大勢いることは知っている。しかし、それは神が定めた方法ではない。私たちは互いを思いやるのだ。

a. そして、このconsiderという単語は、単に親切的なジェスチャーで一過性の考えという意味ではない。そうではなく、このギリシャ語の単語は、ある事柄に非常に注意深く注意を払うこと、よく考えることを意味している。また、何かに対して大きな尊敬と敬意を示すという意味もある。

b. これは、著者が以前、私たちの告白の使徒であり大祭司であるキリスト・イエスを考えるように勧めたときに使った言葉と同じだ。(ヘブライ3:1)。

i. 私たちは、キリストに対するのと同じように、互いに注意深く配慮し合う必要がある。それくらい、お互いを思いやることは大切なことなのだ。

3. さて、このように思いやる必要性を見ていくと、著者はなぜそうする必要があるので、3つの目的を示している。一緒に考えてみよう。

B. その1、私たちは愛と善行をかき立てるために互いを思いやる。

1. ギリシャ語の「かき立てる」という言葉は興味深いもの、NT全体でも他に1回しか使われていない。この単語は、否定的な意味で何かを煽るという意味と、肯定的な意味で何かをかき立てるという意味を持っている。

a. パウロとバルナバが第二次伝道旅行を計画する際に、パウロとバルナバの間に生じた鋭い論争について語られるとき、この言葉は否定的な意味で使われる。

i. 使徒言行録15章には、「争いが険悪になったので、彼らは別れた」とある。バルナバは結局マルコを連れてキプロスに向かい、パウロはシラスを選んでシリアとキリキアを經由して出発した。(使徒15: 39)。

b. その鋭い争いは、ここで「かき立てる」と肯定的に訳されている言葉と同じである。しかし、考え方は似ており、どちらも挑発的な行動を意味する。

2. しかし、キリストにある兄弟姉妹のことを考えるとき、願わくば、彼らを挑発したり、問題をあおったりしないでほしい。私たちが愛と善行を刺激したり、かき立てたりすることである。

3. さて私たちがかき立てたいと願う愛と善行は、主との関係の副産物であることを理解することが非常に重要だ。

a. これらは、私たち自身の努力でかき立てるものではない。神との関係の副産物なのだ。私たちが神に近づき

神は私たちに愛を注いでくださり、私たちのために備えてくださった善い業に導いてくださる。

b. ここで言及されている愛は、主のアガペーの愛であり、主の無条件の、無償の愛である。それは主との親密さを深める副産物である。ガラテヤ5章によれば、御霊の実は愛である。神は御霊を通して私たちにご自身の愛を与え、私たちはそれを互いにかき立てるのである。

c. 神は良い行いのために私たちを造られた。エペソ2:10には、こう書かれている。"私たちは、良い行いのためにキリスト・イエスにあって造られた神の作品であって、私たちはその道に歩むようにと神があらかじめ備えておられたのです。"(エペソ2:10)。

4. 思いやるとき、私たちは互いの内にあるこれらのものをかき立てるように意図されている。神は私たちに愛を与えてくださり、良い行いをさせてくださるが、時に私たちは主のための愛と行いに無気力になったり、無関心になったりすることがある。だからこそ、神は私たちに互いを与え、互いを絶えず奮い立たせるようにされたのだ。

a. ここで、私や少数の人々が応援団としてここに立ち、さまざまなかき立てる壮行会のようなものを想像しないでほしい。あるいは、教会は私たちをある種の感情のジェットコースターで興奮させるような、感情をかき立てるような壮大な演出をするものだとも思わないでほしい。

b. いや、そうではない。私たちが愛と善い行いにおいて互いに励まし合う最も単純な方法の一つは、私たち自身がそれを行うことである。それがone anotherという言葉の意味するところだ。この言葉は、私たちが互いのために励まし合う相互の活動を語っている。

c. たが互いに愛を示し、他人のために良い行いをするとき、人々はその愛に応える可能性が高くなり、その善行に報いる可能性も高くなる。

d. だから私たちのうちの何人かが、私たち全員をある種の感情的な反応に駆り立てるといふ意味ではない。それよりも、私たちが互いに愛のうちに歩み、主が導かれるままに互いに仕え合うことなのだ。

C. その2。意図的に互いを思いやる2つ目の目的は、集うためである。

1. 25節には、私たちは、ある人たちのように、共に集まることを捨ててはならないとある。私たちは共に生活するように命じられている。私たちは信者の共同体の一員であるように召されているのだ。誰もクリスマン生活を一人で歩むようには召されていない。私たちは互いを必要としている。

2. 私たちは皆、神の教会の一員なのだ。日曜日の、この場所に来るとき、私たちは教会に来ることを「教会に来る」と言うかもしれないしこの建物に来ることを考えるかもしれない。

3. しかし、教会は棒やレンガではない。あなたと私が教会であり、私たち全体が教会なのだ。私たちはキリストの体なのだ。そして、キリストの体は、それが意図されたように機能するためには、そのすべての部分が一つになる必要がある。

4. もし教会の手が突然、自分たちはもう教会を必要としない、自分たちはもう体の他の部分を必要としないと決め、体から自分たちを切り離し、近寄らなくなったらどうなるだろうか？
  5. 手も身体も苦しむことになる。手が正しく動くためには、体の他の部分が必要であり、腕が必要であり、胴体が必要である。そして、神がデザインしたように、身体が正しく動くためには手が必要なのだ。
  6. 私たちが、教会はそれほど重要ではないと判断するとき。あるいは、教会とは神と会うことだけが目的だと考えると、的外れになる。
    - a. ある人々は、自分たちだけで教会に行けると思っている。ビーチで、ハイキングコースで、あるいは単に他の何ものからも離れて、教会をすることがいる。
    - b. それは教会ではない。そして、それは神があなたを召されたものではない。
    - c. それでは成長しない。神に近づき、神とともに過ごす機会はあるかもしれないが、それは教会ではない。
  7. 教会はからだのように動くものだ。私たちは、すべての部分がそれぞれの役割を果たし、愛のうちにからだを造り上げるために、からだを成長させる効果的な働きに従って、各関節が供給するものによって結び合わされ、結び合わされているのである。(エペソ4:16)
  8. 神がこの設計されたのだ。ここに一人ひとりに果たすべき役割があり、私たち一人ひとりに分かち合うべき役割がある。そして、私が皆さんに考えなければならない質問は、「あなたの役割は何か？そして、それに忠実に取り組んでいるか？」ということだ。
  9. 人々が参加し、負担を分かち合い、自分の役割に貢献する機会はいくつもある。私は、私たちが健全で効果的なキリストの体であってほしいと願っており、そうなるためには、全員が一貫して集まり、それぞれの役割を果たす必要がある。
- D. さて、私たちが意図的に互いのことを考えなければならない理由として、3つの目的が挙げられていると言った。愛と善行をかき立てるために互いを思いやること、集うために互いを思いやること、そして3つ目は、最後に互いを励ますために互いを思いやることである。
1. 25節はこう続く。「しかし、互いに励まし合い、その日が近づいているのを見るにつけ、なおさらである。
  2. 励ます」という言葉はギリシャ語の「パラカレオ」である。これは複合語で、"para"は「」、「kaleo"は「呼びかける」を意味する。この言葉には、互いに助け合い、助け合い、慰め合い、励まし合うという意味が込められている。
  3. キリストの体は、あなたを助けるためにここにある。あなたのそばにいる。あなたが必要としている時に助ける。私たちはキリストに取って代わることはできないが、あなたをキリストに導くことはできるし、キリストの愛と配慮をあなたに伝えることはできる。

4. 肉体が肉体に奉仕するのを見るのは、とても美しいことだ。誰かがつらい時を過ごしているとき、誰かが人のそばに来て慰め、相槌を打つを見るのは力強いことだ。
  5. そして、それが私たちに求められているのだ。私たちは互いの重荷を分かち合う。それが、互いを思いやる神が私たちに求めることだからだ。
  6. そして、私たちの時間はことを理解した上で、そうするのだ。その日が近づくとつれ、私たちはいっそう励まし合うことになる。
    - a. その日」とは、キリストが花嫁のために戻ってくる日のことだ。一日一日がその日に近づいている。そして、キリストの花嫁である私たち教会は、主であり救い主であるキリストと対面する準備を整えておきたい。私たちは準備したいのだ。
    - b. そして、私たちは励まし合い、寄り添い、助け合い、互いの重荷を分かち合う。
- E. 君たち、私たちは意図的に互いのことを考えなければならない。互いに奮い立た、キリストの体として集い、日を追うごとに励まし合うために。
1. 時間は短い。私たちは主との歩みの中で、意図的に、目的をもって行動しなければならない時なのだ。
  2. 私たちは、神に近づき、神との関係の中で成長することを意図的にしなければならない。私たちは、キリストにある私たちの永遠の安全という希望の告白を堅く守ることに、意図的に取り組むことである。そして、私たちが主を待ち望むことができるように、互いを思いやり、互いの関係を成長させることを意識するのである。
  3. アーメン？ アーメン

## VI. 結語／コミュニオン

A. 聖餐式は、私たち教会にとって、今朝話し合ったことを実践する絶好の機会である。

1. 聖餐式とは、キリストが私たちのためにしてくださったことを思い出すことである。そして、今朝の私たちの学びは、ほとんどその上に成り立っている。キリストが誰であるか、そしてキリストが私たちのためにしてくださったことに基づいて、私たちは今、ある特定の領域において意図的に、目的をもって行動しなければならない。その第一は神に近づくことであり、それこそが聖餐式なのだ。
2. だから、それが今日私たちがしようとしていることだ。神に近づくのだ。祈り、神との交わりの時を過ごすのだ。神が私たちのためにしてくださったこと、そして私たちのうちに、私たちが通してしてくださることを感謝するのだ。
3. この時間は、主が私たちの心を探り、主が働きたがっておられる領域を示してくださる、内省の時間でもある。私たちが、特定の領域における聖霊の導きと導きに心を開くことができるように。

4. 必要であれば、この聖餐の時を告白の時とし、神が私たちを呼び出しておられることから立ち返り、神が私たちを導き導いておられる領域に服従する悔い改めの時としよう。

B. 係員が聖体拝領の道具を配るので、私が戻ってくるまで持っていてほしい。

1. その間、ワーシップ・チームが賛美の歌をリードしてくれる。主が導かれるままに、自由に参加してほしい。

2. 歌が終わると、私が戻って来て、教会の家族と一緒にエレメントに与るようリードする。

3. これからの数分間、神に近づき、神との交わりを楽しもう。